論　文

広島女子高等師範学校と女子学生文化の胎動

田中卓也

はじめに

本研究は、第二次世界大戦終結直前の一九四五（昭和二〇）年四月に創設された「広島女子高等師範学校」をとりあげ、女子高等師範学校学生の実態について明らかにするとともに、七年間で廃校となった同校の女子学生の「文化」についてふれてみたいと考える。同校卒業生である大津康子は、「激動の昭和の初期に生を受けた私たちは、比較的おだやかに子供の生活をたのしめた戦前の児童中心主義教育と、皇国史観に基づく軍国主義教育の戦時中に女学生時代を過ごし、戦後は民主主義思想に覚醒と自立を促されるという、戦前・戦中・戦後の、価値観を全くことにする三つの時代の教育を、前進に浴びて成人した世代である」と述べる。[1] まさしく戦前・戦後を生き抜いた女学生のひとりであった。広島は、アメリカによる原爆の投下を受け、多くの犠牲者をうみだした。軍都のイメージを払拭するため、戦後は平和運動を推進していくことになった。さらに大津は「あの無残な敗戦間際に、国は何かを夢見て最後の女高師を創設し、戦後の再建に、更に夢見て七年間育成した直轄校を、新制大学構想に組み込んだのであろうか」と同校卒業後、広島女高師の創設に疑問を抱えていた。[2] 一九五二年の廃校に至るまでの七年間ではあったが、戦争の惨禍を経験し、傷を負いながらも、学校に集い学ぶなかで、学生同士の絆を一層深め、母校を誇りに思いながら、卒業した者も数知れないのである。女子学生にとって同校は、多感な青春期を過ごした、いわば女子学生の「園」であったのではないか。かくして執筆者は同学校誌『時のかたみに』（同誌編纂委員会、一九九八年）を中心に僅かに残された資料から検討・考察を加えている。なお原爆による資料の焼失で史実の考察・検討には限界があることを先にことわっておきたい。貴重な残存資料をもとに、広島女子高等師範学校での女学生の心性・真情に迫ることで、彼女らの「オトメ心」に内在した学校への帰属意識についてふれながら、また当時の「（女学生）文化」がいかにしてつくられたのかに着目することは、当時の学生の「心性」を分析するという意味で、意義があるものと考えられる。

広島女子高等師範学校に関する先行研究には、三好信浩氏の『日本

師範教育史の構造 地域実態史からの分析』東洋館出版社、一九九一年）等が存在する。同書のなかで三好氏は、広島女子高等師範学校について、「戦時中とはいえ、広島に女高師が誕生したことの意味は大きい（中略）特に女高師の場合は、名門の高等女学校を国家に寄付するという形で実現を見た（中略）東京や奈良のような女高師とは違って、さきに民間の女学校があって、それの上層に女高師が成立したのである、地域における地域民の主体性が生かされている。それが女高師であったというところに、広島における高師文化の最後の開花を見て取ることが出来る」と述べており、広島女子高等師範学校の設立意義および役割で評価できるものとし、「高師文化の開花」の一端を伺わせるものと位置づけている。[3] しかしながら女子高等師範学校の「学生文化」については、ふれられていない。また『広島大学二十五年史　包括校史』（同史編纂委員会、一九七七年）や『広島市学校教育史』（広島市教育センター、一九九〇年）では、女子高等師範学校の創設や経緯にふれてはいるが、いずれも学校紹介およびその客観的記述にとどまっている観が否めない。本研究では、これまで研究が進められることがなかった広島女子高等師範学校の学生文化の実像に迫ってみたい。

一、広島女子高等師範学校の誕生

（一）山中高等女学校の創設と変遷

広島女子高等師範学校についてふれる前に、同校の前身である「山中高等女学校」について説明しておきたい。[4]

山中高等女学校は、県会議員・弁護士であった山中正雄が女子中等教育を振興する必要があろうと考え、一八八七（明治二〇）年一二月、時の広島県知事や多くの有志家の賛同を受け、私財を投げ打ち「広島高等女学校」として設立された。広島には、これまで「広島尋常師範学校」・「広島中学校」の二校しか存在しなかったこと、また「女学校」としては、全国を通じて京都、宇都宮に次いで三番目の女学校として誕生したこともあり、広島における高等女学校の設立はとりわけ世間から注目を受けた。

一九〇二（明治三五）年、「県立広島高等女学校」が設立されたことに伴い、同校は「私立広島高等女学校」と改称、一九二〇（大正九）年には、「山中高等女学校」に改称され、翌一九二一（大正一〇）年には「財団法人山中高等女学校」となり、以後二十四年間この名称で女学校は続いた。設立者の山中は、日本主義の教育方針のもと、女性に対し「温良」・「貞淑」・「犠牲」・「奉仕」の人格と堅忍の精神を養成することを目的とした。その目的をのちに「柔而剛」として校訓に定めた。また同校は女子教育のみならず小学校女子教員養成も実施し、全国にその名が知れ渡った。当時の学生数は五百名を超えていたといわれる。

高等女学校での教育には正雄の妻山中トシの力に寄ることが大きい。トシは、同校を卒業後、東京女子高等師範学校に入学し、卒業後は母校である広島高等女学校に奉職した。その最中に正雄と結婚した。結婚後トシは、財団法人山中高等女学校理事長に就任し、学校の経営や教育に邁進した。トシは女子教育のさらなる発展を期待し、

一九四五（昭和二〇）年に創立五〇年を迎えた山中高等女学校を国に寄贈した。[5] これに伴い同年三月三十一日、山中高等女学校は文部大臣の命により廃校に至った。それと時を同じくして山中高等女学校は「広島女子高等師範学校附属山中高等女学校」として、再スタートを切ることになった。寄附後トシは、広島女子高等師範学校講師に着任、一九五二（昭和二七）年の広島女子高等師範学校の廃止に伴い、同校を系譜とする「広島大学教育学部附属福山中学校教諭」に任じられ、一九六一（昭和三六）年までの約一〇年間、同校教諭として広島女子高等師範学校の教育実践に最後まで関わり、心血を注いだ。

（二）「広島女子高等師範学校附属山中高等女学校」としての再開

広島女子高等師範学校は、一九四五（昭和二〇）年三月に文部省直轄学校として創設された。わが国では、東京・奈良に続き、三番目の女子師範学校の誕生であった。山中高等女学校の校地・校舎・施設を国家に寄付したトシは広島女子高等師範学校の附属高等女学校として出発することを長年懇願しており、実現に至ったことを心のほか喜んだ。これにより開校以来五八年間で、一万一〇六九名の卒業生を輩出した山中高等女学校の歴史は閉じられた。同年四月一日、「広島女子高等師範学校附属山中高等女学校」が開設された。「山中」の文字が校名に加えられているのは、時の文部省による寄附者トシへの厚意からであったといわれる。

開校を果たすものの、教員不足の問題は深刻化していた。そのため旧山中高等女学校教職員・学生さらには旧施設をそのまま引き継いだ。教師のなかには官立学校定年退職者なども多く、恩給と俸給を国から支給できないようになっていたことも起因し、一時に多くの退職者を出した。最終的には教職員は一七名程にまで減少した。また学級数についても、附属学校としてはかなり多かった様であるが、年々縮小の方向で進められることになった。いずれにせよ完備ままならない状況のもと、広島女子高等師範学校は開校した。

（三）原子爆弾の悲劇と女子学生

四月開校の同校は、八月六日にアメリカ軍の原子爆弾の投下により壊滅的な被害を蒙った。ここでは、当時教授であった星野春雄の「被爆の前後」（手記）より被爆前後の広島女子高等師範学校の校内事情について見てみることにしたい。[6]

創立最初の授業というので、学校長が各科合併、本校最大の教室（洋裁教室?）に、厳粛そのもので勢揃いしていた。体育科は窓際、中央は家政科、奥は理科という配置。そのうち大藤淑恵は忘れものをとりに寮に帰り、問題の瞬間階段の途中にいた。又若林敦子は、気分悪く、寮で就寝中であった（中略）附属女学校の四年の一部は、第二総軍の暗号係として動員、特殊訓練のための指導軍人の来校を待つ間、三々五々運動場や防空壕付近に遊んでいた。又一部のものは、勤労動員の配置換えの打ち合わせに来る軍部からの使者を接待するため、料理教室にいた（中略）附属の一年二年は、工場勤労には役立たない年少ゆえ雑魚場町一帯の疎開作業に従事していた。疎開作業というのは、幅広い防火地帯を作るた

め、まずロープで一般家屋を引き倒し、めぼしい防空壕設営資材を取去り、その後始末をするもの、壁の中に入っている竹や瓦の後片づけなどの仕事である。時あたかも酷暑の土用、朝早く仕事を始めて早く帰宅しようというので、七時半始業。そして運命の八時十六分を、全身露出のまま、瓦の手送り、よいしょ、よいしょの最中に迎えた

女子高等師範学校の教員・学生ともに普段と変わらない生活を送っていた。戦時体制の影響下で、同校の女子学生は「工場勤労」作業に追われた。そして八時十五分に彼女らの運命を変える「一瞬」の出来事が起こった。「被爆」について星野はさらに次のように当時を話す。[7]

女高師生は教室が二階であったので、放射線と爆風に曝された。爆風に乗って、五十米も空中非行をして立っていた（亀尾真佐子）者もあったが、多くは床がわれて下に落ち、さらにその上に防火壁が倒れたため不運のものも多かった。附属女学校の生徒たちは、光った瞬間運動場にいたもの、防空壕附近にいたものなど校舎に逃げ込み、続いて襲った爆風のため校舎の下敷きとなり、その上に防火壁が倒れて伏せられた。ここは一ヶ月後に掘られたが、死者の氏名は不明なものが多かった。雑魚場町の疎開作業場では、全員全身に放射線を受け、続いて爆風に叩きつけられた

八月六日の原爆投下により、広島市は壊滅的打撃を受けた。中心部その近辺にわたり、多くの死傷者を出した。原爆の惨劇は、広島女子高等師範学校の学生・教職員の生命をも奪った。未来の子どもらの教師となりうるはずの女子学生の姿は余りにも無惨なものであった。生存した女子学生の面前に映ったのはどんなものであったか。それは「絶望」という雰囲気に覆われたまさに「暗黒の世界」であったのかもしれない。

当時学舎は広島市内千田町に存在したので、被害の大きさは計り知れない。一〇代の半ばに入学をし、青春期を過ごしていた附属山中高等女学校学生、広島女子高等師範学校一期生の女子学生八一名は生死を分かち合う状況にあった。原爆は学舎を瓦解焼失させ、七名の命を奪い、残り七四名を被爆の傷にさらした。広島女子高等師範学校の船出は、このことが物語っているように、決して順調なものではなく、苦難の連続であった。

女子学生の学びの園であった両校は、黒い焼跡しか残っていなかった。それを目撃した学生らは、立ちすくみ、むなしさだけが大きく残ったであろう。しかし被爆学生のなかには、絶望の淵で彷徨いながらも、「自立」を目ざし力強く生き抜こうとする者も存在した。当時山中高等女学校四年生に在学しており、被爆し片眼の視力を失った山中フミコは「『戦争を絶対に起こさない人間を育てる』ための日常的教育生活に専念したことに、今日ささやかな誇りをもちつづけてい」こうとしていたし、[8]同級生の香川久子は「現代の若い人には想像もつかないほど悲惨な戦争を体験した人が、次第に少なくなる」ため、「今のうちに出来るだけ記録に残し、それらを語り継ぎ、永遠の平和を、お互いに願ってゆくことが大切である」と述べている。[9]女子学生は新しい「平和」の世の中がいつになるのかは見当もつかなかったが、力強く生き、この歴史的事実を「語り継ぎ」、「永遠の平和を願う」ことで、

このような悲惨な戦争の犠牲にわたしたち人間がなることが絶対あってはならないと強くメッセージを後世の学生らに残した。

終戦後、「軍都広島」は、「平和都市広島」を目指し、生まれ変わろうとしていた。女子高等師範学校一期生が皮肉にも戦争の犠牲となったが、二期生以降に入学した女子学生は、女子高等師範学校の復興の推進力として、混迷していた社会に明るい光を照らそうとした。そして力強く粘り強く、混迷していた戦後を生き抜こうとした。

二、復興下の広島女子高等師範学校

（一）復興にむけて

終戦後まもなく「学びの場」の復興を求めた教職員・学生らの多大な尽力により、翌年九月五日、広島女子高等師範学校は、広島県下高田郡吉田町（現在の安芸高田市吉田町）にあった広島青年師範学校内に一時的に移動した。附属山中高等女学校は、安芸郡府中町の府中国民学校や高田郡小田村附属中学校修練道場さらには安芸郡祇園町山本国民学校に分散して移動することになった。しかしながら同年一二月には両校を豊田郡安浦町（現在の呉市安浦町）にあった「旧安浦海兵団跡施設」に合体移転することになった。かくして広島女子高等師範学校は、安浦校舎にて再出発とすることとなった。

（二）教育内容

広島女子高等師範学校ではどのような教育が行われていたのか。一九四六（昭和二一）年に制定された「広島女子高等師範学校学則」を見てみたい。[10]

広島女子高等師範学校学則

第二章　学科・学科目・学科課程及修練

第四条　学科ハ理科・家政科・体育科トス

第五条　理科ハ数学選修・物象選修・生物選修トシ其ノ履修スベキ学科目左ノ如シ

数学選修及物象選修　修身公民、教育、家政、数学、物象、生物、外国語、工作、音楽、体操

生物選修　修身公民、教育、家政、数学、物象、生物、外国語、音楽、体操

第六条　家政科ハ育児保健選修・被服選修トシ其ノ履修スベキ学科目左ノ如シ

修身公民、教育、物象、生物、家政、育児、保健、被服、農芸、図画、国語、外国語、音楽、体操

第七条　体育科ノ履修スベキ学科目左ノ如シ

修身公民、教育、家政、国語、体育学、体操、音楽理論、声楽、器楽、音楽史、美学、外国語

第八条　修練ハ日常行フ修練、毎週定時ニ行フ修練及学年中随時行フ修練トス（中略）

第十二条　現ニ官職又は公職ニ在ル者ニシテ本校ニ入学セントスル者ハ入学願書ニ本属長官ノ承認書ヲ添付スルヲ要ス

同校は、「理科」・「家政科」・「体育科」の三科から構成されていた。三科に共通している教科目には「修身公民」・「教育」・「外国語」・「体操」があった。また「音楽」についても共通科目であるが、理科および家政科は「音楽」の名称であったのに対し、体育科については「音楽理論」・「声楽」・「器楽」・「音楽史」と四科に分かれていることから、専門的な内容が教えられるようになっていものと考えられる。また教科外ではあるが、「修練」というものが明記されている。戦前の教育課程の名残であろうか。

また入学資格については、「高等女学校卒業者」であったが、高等女学校学生に限らず、「官職又は公職ニ在ル者」についても入学が許された。幅広く門戸を開放し、教育者に見合った多くの有能な人材を確保しようとした。

つぎに同校の学科課程について見てみたい。[11]

広島女子高等師範学校学科課程

三、一般教養の内容

社会科学　社会組織、国家と法制、政治の発達、経済組織と産業国際関係

人文科学　国語国文、世界現代史、思想と表現、哲学思想、社会科学の発展、芸術の問題、宗教と世界文化、外国文学

自然科学　自然科学の発達、統計

選択科目　数学、物理、化学、生物、家政、国語国文、外国語、音楽、習字等とし専攻学科に応じて適当に選択せしめる。

四、教職科目の内容

第一学年　教育的心理学、学校衛生

第二学年　発達心理学、青年期の心理と衛生、教育史

第三学年　教育実習、教授法、管理法、学科課程論、教育史

第四学年　教育概論、教育行政、社会教育、職業指導

同校女子学生に対し、「一般教養」科目と「教職」科目を履修した一般教養の内容は三科の専門教科をすべて考慮して配当しているように捉えることができる。また教職科目については、「教育的心理学」・「発達心理学」、「青年期の心理と衛生」といわれる心理学系の教科を一、二年次に配当し、教育史を二、三年次に配当している教育についての基礎教科となる「教育概論」は卒業年次の四年次に配当していることは興味深い。また『広島女子高等師範学校入学志願者便覧』（昭和二二年一月）より伺うことにしたい。[12]

一、本校の目的

本校は、中等教員となるべき者を養成するを以て目的とします。

（中略）

三、募集人員

理科　約三〇名

家政科　約三〇名

体育科　約三〇名　（中略）

六、入学資格

品行方正、身体健康で、教員となろうとする志操堅実、卒業後の服務義務履行の意志の強固な、夫を有しない女子で、次に該当する

（一）修業年限五年または四年の高等女学校を卒業した者（本年三月卒業見込の者を含む）。
（二）国民学校入学以来十一年間の学校、またはこれと同等の授業の課程を終了し、高等女学校卒業と同等の学力があると認められた者。
（三）専門学校入学者検定規程による試験に合格した者。
（四）文部大臣において、専門学校入学に関し、高等女学校卒業者と同等以上の学力があると指定した者。
（五）昭和十九年三月三十一日までに、修業年限五年の高等女学校の第四学年を修了した者。および文部大臣においてこれと同等以上の学力があると認めた者。

広島女子高等師範学校は、「中等教員」養成機関として誕生し、「品行方正、身体健康で、教員となろうとする志操堅実、卒業後の服務義務履行の意志の強固な夫をもたない女子」であることが定められていた。教員としての自覚を持ったしっかりした学生を求めた。また、同師範学校には「附属中学校」も創設されていた。全国で三校しかない「女子高等師範学校」の一つとして、将来即戦力となる優れた女子教師の養成を行っていた。

三、女子学生の様相

（一）安浦校舎時代の女子学生

戦後の混乱期を過ごした広島女子高等師範学校の学生はどのような様子であったのか。学校誌『時のかたみに』（手記集）よりうかがうことにしたい。入学した女子学生は「全寮制」のもとで、寮生活をスタートした。清明寮・養生寮などが存在し、寮部屋は学年学科混在の状況にあった。日夜寝食をともにした彼女らは、発育盛りであるものの不自由な生活を強いられるなか、「同じ釜の飯」を食し、友情を育んだ。そのなかで次第に連帯感も培われた。安浦時代の一期生であり、後に「寮歌」の作詞を手がけた物理専修一年生の阿蘇美念子は当時の様子を次のように述べている。[12]

そのころの私は、文科系だった女学校時代の自分を引きずっていて、単価の「さわらび会」に入ってみたり、寮歌に応募してみたり、劇の脚本を書いてみたりしたのでした。そして戦後の解放された気持ちと、平和を願う気持ち、未来への希望などをそのままちょっと古めかしい言葉にしてあの歌をつくりました（中略）音楽の先生方が作曲して下さって、私の歌詞は寮歌になりました。以来、事あるごとに歌われ、今も同窓会の時に歌われ、私にとってこんな幸せのことはありませんでした。あれ以来、私の心の底には、あの歌がずっと響いています

寮歌を作詩した阿蘇は、「戦後の解放された気持ちと、平和を願う気持ち、未来への希望など」を詩に込めたのであろうか。彼女の中で、学生生活の思い出に浸りながら一生心に残る歌になった。歌詞にある「高き理想を語らむ」や「新しき希望のもとに」とあるように将来を夢見ながら生きようとしている。そして戦災から生き延びた彼女は、いつも「平和を願う気持ち」を忘れてはいなかった。また同じ一年生

であった鈴木啓子は「安浦日記」のなかで、「一九四六（昭和二十一）年五月八日（水曜）役員の改選。私が寮長になった。おしゃべりが買われたらしい。不精にならずに、一肌脱いで自治的にやってゆきたい」と寮長になって、自らが先頭にたって、「自立」をめざしながら、頑張ろうとする意欲を持った学生も存在した。[14] また当時二年生の後藤美智子は「学寮生活」という手記の一節において、次のように記している。[15]

一九四七年

・二月二十八日　一年修練最後の時間、後藤先生より実に感銘深い話をお聞きした。若さ、若さを失うな。師範タイプに陥るなかれ、教員にして教員臭きは上教員にならず。人には二つのタイプがある。一つは円満型、いいことも出来ぬが悪いこともせぬ。もう一つは溌剌型、若さが漲り欠点はあるが明朗でそれをカバーする何物かがある。若さを失うな。我武者羅にやれ。若さこそ青春の象徴たり。嗚呼、若さ、今の時代に伸びなくて何時飛躍すべきか。

・五月二十日　校長先生のお話、山中女史の特志を忘れてはならぬこと。文化の華を咲かせ気品を高めること。附属高女と共に文化祭を行う。私達は「名工柿右衛門」、「海にゆくのりて」をした。「海にゆくのりて」は声が小さく惜しかった。附属は「安寿と厨子王」、「恩讐の彼方」で月並みなものであまり面白くなかった。高師生が数名見学にきた

手記には「教員」について「若さ」が重要であると指摘している。講義の中でかなり強調されたのであろうが、「若さを失うな」という言葉に、かなりの感銘を受けている。また校長の講話のなかで「文化の華を咲かせ気品を高める」ことも大事であると思ったのであろうか、筆記している。附属山中高等女学校との合同文化祭についても、「声が小さかった」や「あまり面白くなかった」と批評を加え、最後に「自分は鑑賞力が乏しく貧困」と自らの落度について反省を加え、すくなくとも「文化」に関心を抱いていることは想像できよう。また、広島女子高等師範学校校友会が発刊していた『ひろしま女高師新聞』（昭和二十三年五月二十五日号）の編集員の一人であった体育専修の四年生下泉良子が「学園の明朗性」なる記事のなかで、次のように述べている。[16]

学徒が高い知性も明朗な健康、明るい性格が養われる事こそ必要なのである（中略）明るく朗かな性格は個人の考を正しく明るいものにするしたがってかかる性格は社会を国家を、学園を明るく朗かにする。スポーツが正しく明るく行われ私達学生が、明朗に健かに延びて行くならばそれによって作られる国家は今自分達の思っているよりも遙に平和な、そして文化の薫り高い民主国家が現れるであろう

下泉の言う「学徒が高い知性も明朗な健康、明るい性格」を育てる学園が同校に求められていることであり、そのような学園づくりが「遙かに平和な、そして文化の薫り高い国家」づくりの土台となるということを他の学生らにも伝えている。かくして学校の復興にむけて、学生も立ち上がろうと意欲に満ちていた。学生は夏期休業中になると、「復興資金募集活動」を行った。各自が郷里に帰っては、母校等より

寄付を得、集金を持ち寄り運動の基金にしていた。復興資金をアルバイト代でまかなった当時数学専修一年生の吉岡光子は、「休み明けにお給料の全額を職員室に持参しました。『進駐軍で働きました』と言う私に、うっすらと涙を浮かべて『たいへんでしたね』とねぎらってくださった」と述べるように、学生等は必死になって復興の夢を叶えるために奔走した。[17]

(二)「広島女子高等師範学校校友会」の発足

安浦校舎の時代には、「校友会部」が創設された。一九四六（昭和二一年）一月三一日にその発会式が開催された。学生は学寮生活であるため、帰寮の前に放課後や自由時間を利用して課外活動をする者も多かった。校友会には、「文化部」・「運動部」のほか、「同好会（サークル）」等も存在し、他学生等との交流を積極的に図った。この頃特に「演劇部」、「コーラス部」の活躍はめざましかった。近隣の小学校を巡回し、演劇では「ベニスの商人」、「修善寺物語」などを演目として披露し、コーラスでは「ハレルヤ」の大合唱が行われた。これにより在学児童等を喜ばすことに努めたようである。学生時代に演劇部に所属した染谷信子は「ふりかえってみると不自由な中から、少しずつ育ってきた私たちの演劇は、娯楽も何もない戦後に唯一彩りのある、華のあるひとときをもたらしたのは確かであった。思わぬきっかけで、それまで演劇とは殆ど縁のなかった私が演劇と関わるようになり、華を創ることにつらいこともあったが、熱中したことはやはりなつかしい」と述べ、演劇に没頭するなかで、自らの「娯楽」としていたことを懐かしみながらも、誇らしく感じている。[18] また同僚の理科専修二年横山秀子は、「運動会、寮祭でも様々な催しがありました。運動会の仮装行列で、二理の私たちが東海道弥次喜多道中をやったのに対し、家政科の先輩がスマートに当時大流行の『青い山脈』を、そして同期の家政科が『風俗の変遷』をやられたのには、つくづく完成の違いを感じました。意味なく楽しめた当時の女高師の運動会、花形プログラムであったことだけは確かです（中略）物の無い代わりに、どんな発想をも巡らし目的に近い物を作り出す知恵があったと、写真を見ながら感じ入りました」と述べるように、何も無い時代にも楽しもうとする学生の切なる想いが感じられるのである。[19] しかし苦境の中で女子学生らは、敗戦の中から復興を信じて自らの学生文化を徐々に築き上げようとしていた。

(三) 安浦校舎焼失と福山移転

一九五〇（昭和二五）年三月九日午前九時四十分頃、広島女子高等師範学校寄宿舎二階から突然火の手が上がった。隣接の木造二階建寄宿舎、家庭科、理科教室三棟が全焼する火事であった。これを機会に学内では校舎の福山移転問題が湧き起こり、なかば強行されることになった。当時物理専修の三年生守谷シゲ子はその事情について、次のように述べている。[20]

新制大学の設立に当たって、私達の学校が福山に移転するというので、その反対運動が始まりました。三年生の時です。二年生で自治会の役員になったのが、未だにわかりません。広島の各大学

の全学連がその後押しをしてくれました。呉市で、広島市で共に反対の署名運動をしました。授業にはでないで、来る日も来る日もそのことばかり。ある大学では、参加していた私達のメンバーが歌をうたい、注意されました（中略）自治会の活動が牛耳られてはならないという思いだけはありました。そこで、その学生に、活動のあり方について、いろいろ聞きただし、意見をいい、意見を求めました

安浦学舎の頃から、福山移転の話が既に話題になっていたのであろうか。わずか三年間ではあるが、思い出残る安浦校舎を離れることに大変辛い気持ちであったのか。守谷は「授業にはでないで」、「反対の署名活動」に明け暮れた日々を過ごした。原爆の惨劇と安浦校舎の火災は、守谷の心の奥底にさらに深く刻まれた。被服専攻三年生の大島冨美子も、「寮の自室には皆様のスナップを写したフィルムや仕上った多くの写真も置いていたのですが（中略）フィルムは、若さが…青春が…再び求められないのと同じで残念です」と桜の園である校舎と青春の日々を現した多くのスナップ写真が焼失し、落胆している様子である。彼女らは校舎焼失を忘れられない思いと胸におさめ、安浦を離れ、県東部福山の地での学生生活を余儀なくされた。[21]

同年五月一日、広島女子高等師範学校は新設された広島大学教育学部福山分校に付設するかたちで開講することになった。福山分校は「元旧陸軍歩兵第四十一連隊（暁部隊）」の跡地に設置された。しかしながら完全移転ではなく、一年生は福山で、二年生から四年生については、以前と変わらず安浦校舎での講義が続けられた。

福山での女子学生はどのような生活を送ったのであろうか。物理専修三年生の古川洋子は次のように述べている。[22]

若者は皆都会に憧れた、安浦にいた私達も、このようなのんびりした所にいたんでは時代に取り残されてしまう、何が何でも広島へ帰らなければならない。その頃田舎に疎開していて、やがて広島大学に統合されることになる関係諸学校も、一斉に広島復帰のために学生運動を展開した、わが女高師の学生も学業を投げうって（？）活動に参加したのであった

「若者は皆都会に憧れた」と古川が述べるように、原点である広島市内に校舎が戻ることを学生らは、願っていたのかもしれない。「女高師の学生も学業を投げうって活動に参加する」ほど、彼女ら学生には大きな問題となっていた。彼女らの積極的な働きかけもむなしく、その夢の実現は叶わなかった。対照的に、福山での学生生活を満喫するものも存在した。当時保健専修四年生であった手島英子は、福山での新しい生活について「新制大学、青年師範、女高師三・四期生など多くの学生が行き交い、新しい模索の時代の雰囲気が感じられた（中略）自分なりのキャンパスライフを作るということも初めての経験であったし、教養科目の授業には男子学生が混じっていて、これも珍しく、すべて民主主義教育による画期的な改革のスタートラインであった。戸惑いもあったが、『何だかみんなで自由になった』ということを実感した」と言っているように、女子高等師範学校にも変革の時代が来たことを感じ取っていた。[23]「男女共学」・「民主主義教育」という言葉はそのことを物語っているようにも思える。それでいて「自由」になっ

たこと誇らしく思う手島自身も大きな喜びに満ちていたのであろうか。また体育専修四年生阿部貴美などは「休み時間や放課後には、大学生と、ノートの貸し借りをしたり、教えられたり教えたり、校庭に、お茶やコーヒーの飲める小屋？のような売店もあって、三々五々楽しんでいた」と述べるように、共学によって、学園内で男女交際が行われるようになったことが推察される。[24] また喫茶店・映画館の流行により、そこに立ち寄る学生なども増加した。広島女子高等師範学校の学生には、同校が、新制広島大学に統合される時が一刻と迫っているなか、「自由」な雰囲気のもと、彼らは思い思いに学生時代の日々を過ごした。

四、広島女子高等師範学校の終焉

一九五二（昭和二七）年三月、七年間続いてきた広島女子高等師範学校は廃止されることになった。同年三月八日、第四回卒業式および閉校式が挙行され、延べ二五五名の女学生を新たな世に送り出した。女子高等師範学校は、広島大学教育学部福山分校にあった家政科・音楽科・体育科にそれぞれ受け継がれる形をとった。また女子高等師範学校廃止に伴い、同校は同大学教育学部附属福山中学校・福山高等学校と改称されることになり、新制広島大学に包括された。

おわりに―受け継がれる女子学生の「文化」―

広島女子高等師範学校卒業生布目幸子は、女高師の思い出として鮮明に覚えているものに「ピンク色のお白い紙でつくられたバラの花」があると答えている。布目は「生まれて初めて、親元を離れることになった。十六歳七ヶ月の少女の胸中は、新しい生活への期待と不安が入り混じった、緊張感でいっぱいだった（中略）そんな時、あの柔らかい感触の、ピンクのバラを、胸につけてもらったのです（中略）ピンクのバラの造花は、上級生の方々が何日も何日もかかって、作ってくださったものとか。物資のなかったあの時代に、貴重なさくら紙で作られた、やさしい心のこもったバラの造花だったことを、五十年ぶりに知りました」と手記に残している。[25]「バラの花」は代々入学した女学生の胸につけられた。先輩から後輩へと伝統が受け継がれていた。また布目によれば、「広島女子高師生徒の歌」についても歌い継がれたという。初代校長の桜井役が作詞を担当、一九四七（昭和二二）年五月二〇日に全学生に発表され、全校生徒で合唱した。「『校歌』とはせずに、『広島女高師生徒の歌』として歌い継がれた。歌詞が長く、内容が盛り沢山な上に、メロディが美しいが高音部が発声しにくく、評判はあまりよくなかったが、今となってはやはり懐かしい同窓二五五名だけの、心の校歌にほかならない」と卒業生が語っており、広島女子高等師範学校の「心の校歌」として学生ひとりひとりの心に刻まれたのであろう。[26] また歌の一節にある「友垣むすぶ乙女われら」という歌詞からは、これまでの生活の苦楽を共にした女子学生同

士の強い連帯感―絆―を感じさせる。それはまた、彼女らが学生生活においてつねに「自由」・「平和」を求め、そのなかで「文化」を築き上げ、後世の学生等に継承されたのではなかろうか。現在、附属福山中学校高等学校の教育理念の中に「自由と自主」・「自主と共生」という文言が掲げられていることはそのことを物語っているのかもしれない。[27]

広島女子高等師範学校における女子学生の「文化」には次のような特徴が見いだせる。

①原爆の悲劇を山中高等女学校学生および広島女子高等師範学校学生らは経験した。しかしながら今後進むべき道を試行錯誤しながらも、彼女らは、戦争を否定し、「平和」を希求し、後輩らに語り継ぐことで、自立を目指し立ち上がった。苦しみの中からはい上がってきた彼女らは、寮生活を通して、「同じ釜の飯」を食べ、痛みを分かち合いながら、深い絆を結んだ。そのような中から「寮歌」も作られた。寮歌を歌い学生時代を謳歌した学生らの住処であった学生寮は、学生文化の発信源のひとつとなった。

②原爆の惨劇のみならず、校舎火災を経験したことで、校舎を転々とすることになった女子学生は、自らが強い女性になろうとしていった。安浦校舎から福山校舎への移転問題、広島市への校舎復興運動と学生らは、その目標を実現するために一生懸命であった。しかしながら学生の要求は受け入れられなかったが、学生らによる団結力・連帯意識がより一層強くなった。

③戦火にあった同校であったが、学生らの協力により、復興運動として盛り上がりを見せた。校友会の設立などは、その運動に大きく貢献した。彼らは、物がない世の中であったものの、それに臆することなく、演劇、コーラス、スポーツなどのサークル活動に熱中し、打ち込んだ。部活動の多くは、彼らが指導育成した後輩学生らにも伝統として受け継がれていった。

④戦後の教育改革による「男女共学」・「民主主義教育」の風潮や総合大学計画による関係諸学校の統合化、大学移転問題など動揺している一連の動きのなかにおいても、学生らは個々に自らの生活をそれぞれの思いで描き、その実現にむけ努力した。

注

(1)『時のかたみに　広島女子高等師範学校誌』広島女子高等師範学校誌編纂委員会、三頁、一九九八年。

(2)同上。

(3)三好信浩『日本師範教育史の構造―地域実態史からの分析―』東洋館出版社、二八〇頁、一九九一年。

(4)「山中高等女学校」の詳細については、「山中高等女学校沿革略史」（『広島大学二十五年史』包括校史、四七九―四八三頁）を参照されたい。

(5)「寄附理由書」には、①「本県下ノミニオイテモ公私立五十幾校ノ女子中等学校ノ普及ヲ見ルニ至リタル」こと。②創設者山中正雄の二十五年忌に際して「故人ノ教育奉公ノ大精神ヲ永遠ニ生カシメントスル」ためであったと記されている。（同上）

(6)星野春雄「被爆の前後」『生死の火　広島大学原爆被災誌』広島大学

原爆死没者慰霊行事委員会、三〇八―三〇九頁、一九七五年。

(7) 同上「被爆」、三一〇頁。

(7) 前掲『時のかたみに』三頁。

(8) 同上。

(9) 同上、一六七―一六八頁。

(10) 同上。

(11) 同上、一六九頁。

(12) 同上、二三九頁。

(13) 同上、二二七頁。「寮歌」については、二二六頁に掲載。

(14) 同上、二三三頁。

(15) 同上、二三五頁。

(16) 「ひろしま女高師新聞」（広島女高師校友会、一九四八年五月二五日発行）同新聞は、広島大学文書館の所蔵資料である。

(17) 同上、二五二頁。

(18) 同上、三四四頁。

(19) 同上、二七二―二七三頁。

(20) 同上、二九八頁。

(21) 同上、二九九頁。

(22) 同上、三一五頁。

(23) 同上、三二五頁。

(24) 同上、三二七頁。

(25) 同上、二四六頁。

(26) 同上、二四七頁。「女高師学生の歌」については、二九八頁に掲載されている。

(27) 「広島大学附属福山中・高等学校」のホームページ（http//www.fukuyama.hiroshima-u.ac.jp）「学校紹介」の「教育理念とグランドデザイン」を参照。または「校風の確立」『広島大学附属福山中・高等学校　創立五〇周年記念誌』（広島大学附属福山中・高等学校、九二頁、一九九九年）を参照されたい。

（たなか　たくや・吉備国際大学）